地域研究年報 29 2007 41-49

湯村温泉地域における機能の推移と旅館経営

金 玉実・飯島 崇

キーワード：温泉，旅館，湯村温泉，甲府市

Ⅰ はじめに

日本は温泉資源に恵まれ，全国の温泉地数は3000を超える．温泉は古くから療養，保養目的で湯治場として愛用された．第二次大戦後，増大する観光需要の中で多くの温泉地は歓楽地的な性格を強め，宿泊拠点として重視された（山村1987）．しかし，1970年代以降，観光客の観光行動および嗜好が多様化したため，従来の吸引力が弱まってきた（浅香・山村1974）．一方で，近年の健康ブームの中で，温泉の療養機能，保養機能に再び注目が集まり，温泉の価値が再評価されるようになった．本稿は，湯村温泉における観光の変遷，それに伴う旅館経営と地域景観の変化を明らかにすることを目的とする．

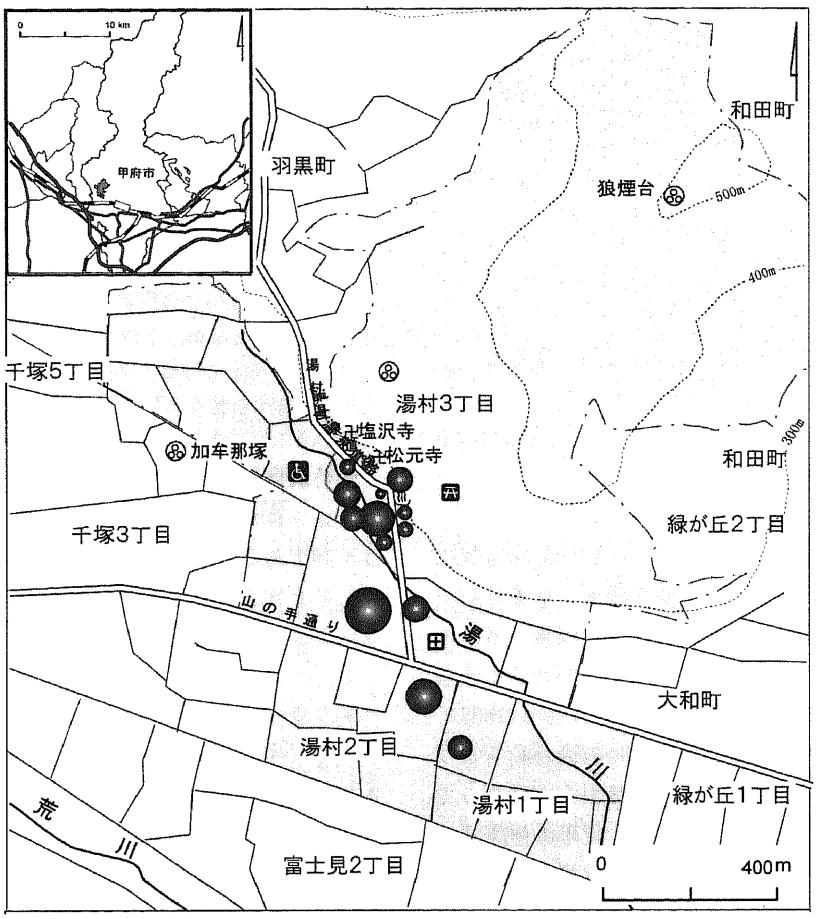
湯村温泉は甲府市街地北西部の湯村地区に位置する（第１図）．その北東部には標高446mの「湯村富士」とも呼ばれる湯村山があり，また湯川が流れている．内陸盆地であるため，気温の年較差および日較差が大きい（年最高気温32℃，年最低気温－2．1℃）．降水量(1109.7mm/年)は少なく，日照時間が長い（2128.7時間/年）．甲府駅前から北西に延びる関屋往還に沿った古い宿場で，甲府駅からバスで13分，車で甲府昭和インターチェンジから20分，韮崎インターチェンジから30分の距離にある．湯村唯一の外湯を中心に，湯村温泉道路沿いに旅館が集中し，市街地内部で温泉旅館街を形成している．

湯村温泉は，808年（大同３）に弘法大師によって発見されたと伝えられているが明確な成立年代は不詳である．しかし，武田信玄の隠し湯の一つとしても知られ，著名となった．湯村温泉の泉質はナトリウムと塩素イオンを主要成分とする「ナトリウム－塩化物泉」が主体を占め，それ以外に単純温泉や，硫化水素を微量含有する含硫黄－ナトリウム－塩化物泉（旧泉質名，食塩硫黄泉）もあり，成分的に類似することから同一の温泉源に由来すると判断されている（中央温泉研究所1990）．切り傷，腫れ物，湿疹などによく効くといわれ，温度は35～49度で加水，加温の必要がなく，源泉の泉質のまま利用できる．

1960年代の全盛期には，温泉地の範囲は万寿森ホテルより東の塩部・緑の丘地区まで広がり，30軒以上の旅館・ホテルがあった．しかし，その後の不景気，後継者不足などの原因による転廃業によって旅館数は減少している．現在，湯村温泉旅館組合加盟の旅館数は湯村３丁目の９軒，湯村１丁目１軒，湯村２丁目１軒，塩部１丁目１軒，緑の丘２丁目１軒である．調査対象地域は湯村１，２，３丁目の地域とした．なお，本文での湯村温泉地域とは上記の地域を示す．

Ⅱ 湯村温泉の質的変遷

本章では，湯村温泉の発展について記述した浦(1998)，湯村温泉郷における温泉旅館経営者に対



第１図　湯村温泉地域

する聞き取り調査をもとに，湯村温泉郷の質的変遷を時系列的に示していく．

Ⅱ－１　第Ⅰ期（～明治初期）

湯村温泉の正確な成立時期は不明である．中世期では，武田信玄等，武士による傷病治療に利用されてきた．近世期において，弘法杖の湯（新湯鉱泉），鷲の湯（島鉱泉），谷の湯（野湯鉱泉）といった源泉が存在した．しかし，江戸期～明治期にかけては，周辺の農民が利用する温泉，農耕馬向けの温泉としての性格を有していた．湯治宿は傷病人の宿泊所，馬主の宿泊場として機能していた．

近世末期では，湯村の全戸数である32軒が湯株を所有しており，「鷲の湯」は「村持ち」の共同浴場として管理されており，組織的な湯治宿の運営がなされていた．

Ⅱ－２　第Ⅱ期（明治初期～大正期）

明治期から大正期にかけては湯治場としての発展期であり，住民の努力や行政の介入により，湯治客を受け入れる温泉旅館が増加した時期である．1873年（明治６），当時の山梨県令により，鷲の湯の改築工事，湯村新道の開発が行われ，湯村の湯治場としての機能が向上した．この開発政策に呼応するように，湯村の地元住民の中に旅館を創業する者が出現した．さらに，山梨県内の他

地域からも資本の流入がみられ，新たにボーリング工事を中心とする私有源泉の掘削工事もなされるようになった．

利用客にも変化が見られるようになり，長野の養蚕業者，行商，さらには軍人も湯村温泉を休暇や湯治に利用するようになった．

Ⅱ－３　第Ⅲ期（昭和初期～第二次大戦後）

この時期にはボーリング工事による新規温泉開発が進行した．1934年（昭和９），万寿森温泉掘削を契機に，源泉の私有化が進展した．浦（1998）によると，1983年当時に存在した17本の旅館の内湯向けの源泉のうち，13本もの源泉がこの時期に掘削された．

温泉旅館も市内資本の3軒を含め，８軒の新規開業がなされ，温泉集落の拡大がみられるようになった．しかし，急速に進行した乱掘により，古くからの温泉である谷の湯と杖の湯は枯渇し，外湯は廃止された．そのため内湯が一般化した．さらに，湯村における温泉旅館の急増により，御岳昇仙峡への観光客が湯村を宿泊拠点として，観光ルートに取り込むことによって，湯村は湯治場としての性格から温泉観光地としての性格を強めるようになった．温泉旅館だけでなく，土産物屋，飲食店，芸妓といった観光サービス業の増加も顕著にみられるようになった．

Ⅱ－４　第Ⅳ期（第二次大戦後～1960年代）

戦後から高度経済成長期にかけて，交通条件の改善，甲府市などの観光政策により，飛躍的に観光客数が増加した．さらに，甲府市周辺の周遊観光における宿泊拠点としての性格を強め，湯村は湯治場から観光地として変化した．一方，1961年の石和温泉の開発により，湯村の観光地としての地位は相対的に低下した．しかし，浦（1998）によると，1966年には湯村における温泉旅館の総数は32軒に達し，観光地としての全盛期を迎えた．

利用客の属性にも変化が生じた．それらは，首都圏からの企業団体，地元の企業・社会団体，さらには首都圏，名古屋圏からの家族客といったグループに分けることができる．各グループの滞在目的に着目すると，首都圏からの企業団体は主に社員研修，会議，保養行事が大半を占めた．地元の企業･社会団体は，社員研修，新年会，忘年会等，社内行事を目的としていた．一方，首都圏・名古屋圏からの家族客は，昇仙峡や富士五湖，富士山などの自然観光やイチゴ狩り（１～３月），さくらんぼ狩り（５～６月），桃狩り（７～８月），葡萄狩（９～11月）といった観光活動のための宿泊拠点として利用した．いずれの客層も１～２泊という短期滞在客であった．

温泉の管理体制は，共同浴場（35の地元株主による持ち株制で運営されている鷲の湯）以外はほぼ全てが私有源泉となった．

温泉旅館は，湯村温泉地の中心を南北に縦断する湯村温泉道路を中心に分布していた．一方，温泉地の周辺には，農地が卓越し，周辺の宅地化はそれほど進行していなかった．その結果，農村に存在する温泉地という景観がみられた．

Ⅱ－５　第Ⅴ期（1970年～現在）

1970年代，湯村は２つの大きな問題に直面することになる．１つ目は，石和温泉の台頭である．石和の発展とともに，石和への宿泊客・温泉旅館経営者の流出は顕著なものとなった．２つ目は1973年の石油ショックである．石油ショックは全国的に観光客の減少を招き，湯村のみならず，日本全国の温泉観光地を深刻な経営難へと導いた．そのような中で，湯村は新たなる温泉旅館経営の転換を図ることを迫られた．

有力な温泉旅館を中心に，３つの大きな経営転換がみられた．第１に，旅館の多店舗化である．これは他の温泉地で，旅館店舗を買収もしくは新築し，経営拡大を図るものである．第２に，旅館経営者自身による他産業への新規参入である．旅館経営を行うかたわら，郷土料理店・ファミリーレストラン，喫茶店，スナック等の飲食店，さらにはアパート，マンション，駐車場等の不動産賃貸業を営む者がみられるようになった．第３に，旅館付帯設備の増築や宿泊施設自体の改築であ

る．従来の宿泊機能に加え，大ホールや宴会場，ダイニングルーム（披露宴，パーティー，会議向け）や料理店を有する旅館経営へと転換していった．また，一部の温泉旅館は，温泉病院や温泉保養所といった，新しい業態へと転向した．それに合わせ，利用客の属性も多様になり，首都圏・地元企業団体や地元の社会団体，地元住民，スポーツ団体，障害者，高齢者などの幅広い顧客を集めることが可能となった．

この時期，後述するように甲府市街地が拡大した結果，周辺の土地利用をみると，宅地化が進み，農地が住宅地へと変貌した．さらに，大型ホテルの建設，道路網の拡張も顕著にみられる．こうして，湯村温泉は急激な都市化，温泉地内部の質的変化により，旧来の温泉郷としての景観が次第に消失していった．

Ⅲ　湯村温泉の景観と旅館経営

Ⅲ－１　湯村温泉の景観

湯村が甲府市域に編入されたのは1942年で，それ以前は大宮村の一部であった．当時は水田や畑，桑園に囲まれ，旅館の開業は盛んであったとはいえ，静かな農村景観が卓越していた．高度経済成長期の観光ブームの中で湯村温泉の主要道路沿いには旅館と飲食店，土産店などの観光関連施設の立地が相次ぎ，温泉観光集落の景観を示すようになった．

高度経済成長期以降，甲府市街地は西へ拡大を始めたが1965年の土地利用では，依然として，広大な畑と水田がみられた（第２図左）．1966年，首都圏整備法によって山梨県が関東の１都６県とともに首都圏の一部に加えられ，甲府市域はその都市開発地域に指定された．その後湯村およびその周辺地域の都市化がより激しくなった．都市化前線は湯村南東の塩部から湯村地域へ伸び，さらに湯村北部の羽黒，山宮地域に県営アパートが建設され，住宅地化が進んだ．水田が次々と埋め立てられ，人口の急激な増加は，農村的な景観を有した湯村温泉地域のイメージを都市内部の温泉地へと変化させた（第２図右）．また，湯村温泉道路は羽黒，山宮団地から市街地へ向かう主要道路としての性格を強め，通過通行量が徐々に増加した．

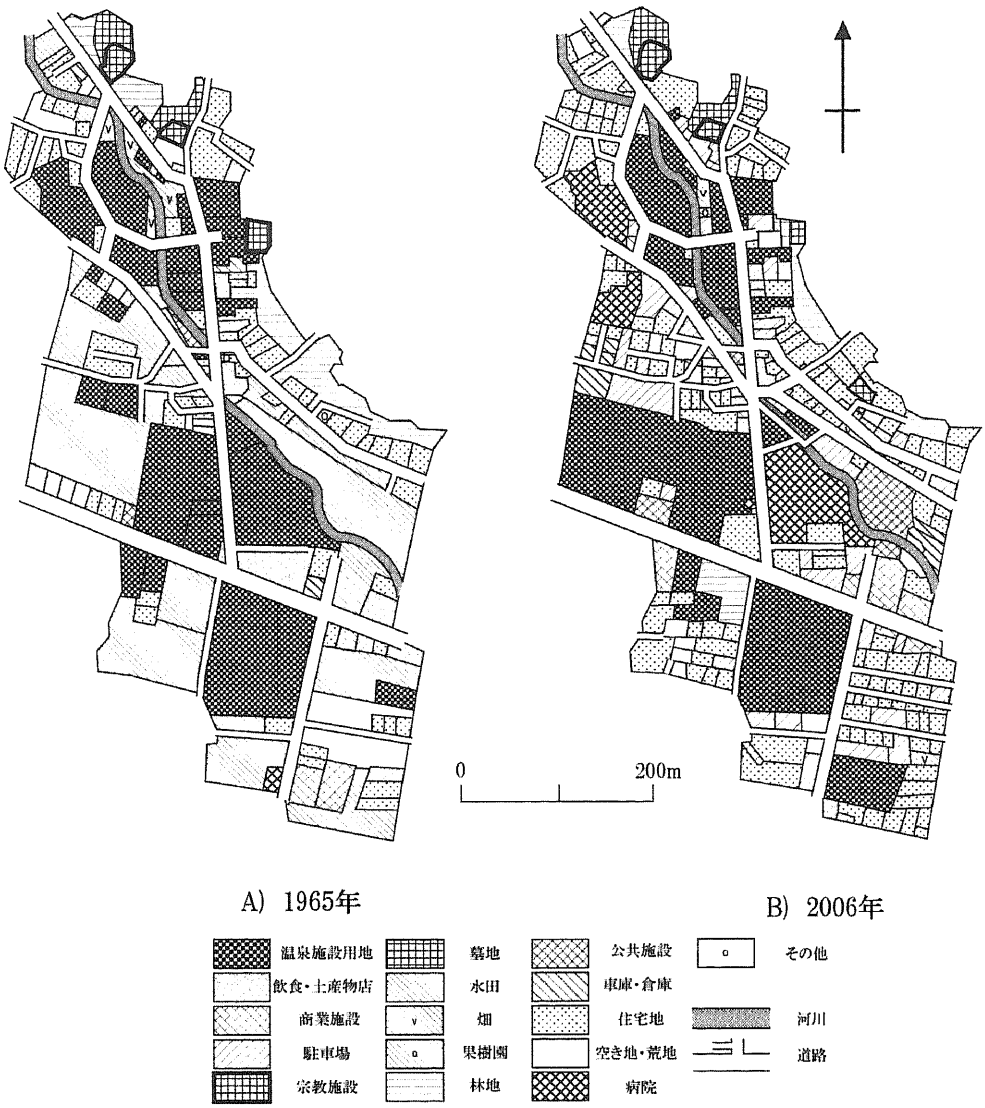
現在，湯村温泉地域にかつて広がっていた畑や水田はすべて住宅や駐車場に変わり，自家用の野菜畑がわずかに存在するに過ぎない．また，道路通行量の増加は，湯村温泉通りの両側の交流を妨げ，観光客や住民がのんびりと散策することができなくなった．湯村温泉道路は幅は狭いものの，現在，一日の自動車通過量は1000台以上に達している．

Ⅲ－２　旅館経営の実態

湯村温泉地域における旅館数は13軒で，全体の収容人数は1748人，うち源泉を有するのは10軒である（2006年）．1965年の住宅地図によると，当時の旅館数は28軒で，収容人数は2210人であり，数多くの観光関連施設の立地がみられた．近年では，経営の多角化，経営規模への拡大，施設の増改築，他業種への転業，廃業などがみられる．なかでも温泉療養機能を活かした老人ホーム，病院，病院の付属施設への転業が存在する一方で，後継者不足が問題になり，廃業した業者も現れている．本地域の旅館は旅館経営形態と規模によって次の３種類に分けられる（第１表）．

１）大規模企業経営型

大規模企業経営型の一般的特徴は，規模が大きく，正社員の雇用人数が多い．Ａホテルと Ｂホテルがこの類型に該当する．Ａホテルは以前の昇仙閣旅館を買収した国際興業グループの所有であり，改築を行って，1989年に開業した．都市中心部にみられるビジネスホテルのような性格が強く，平日はビジネス客の利用率が高い．富士屋ホテルチェーンによる運営で，収容人数は450人に達する．従業員数は160人で，そのうち８割以上が正社員である．2004年にリニューアルし，宴会場，チャペル，温泉露天風呂を増築した．800人を収容できる大型宴会場など，多様な施設を有し



第２図　甲府市湯村温泉地区における土地利用の変化
（1965年はゼンリン「住宅地図」，2006年は現地調査により作成）

ている．

国際観光旅館連盟に加入しているＢホテルは1929年に甲府の資本によって開業した．昭和期の２回にわたる温泉のボーリング，1992年の別館増築の結果，現在の規模に至っている．2002年には露天風呂を完備させた．現在の収容人数は250人，従業員は50人に達している．敷地面積は3000坪で和風式建築と広い和風庭園が特徴であり，皇室関係者や井伏鱒二などの有名人と関連づけられた由緒ある旅館として格づけられている．利用客は40代から60代が主体で，客室平均稼働率は60～65％に達する．全体の8割が県外客で，首都圏がそのほとんどである．特に，最近では地元女性客の日帰り利用が目立って増加している．

第1表　湯村温泉における宿泊施設経営(2006年)

類型	旅館	部屋数	収容人数	温泉許可	労働力(人)	
					家族	常雇社員
1	A	102	420	有	無	120
	B	50	250	有	2	30
2	C	28	144	有	3	2
	D	21	110	有	1	6
	E	43	240	有	2	10
	F	99	138	有	2	不明
	G	19	120	有	4	1
	H	24	120	有	2	不明
	J	14	65	有	3	無
	K	13	60	有	4	2
3	L	11	45	無	2	無
	M	不明	20	無	2	無
	N	10	41	無	2	無

(宿泊施設での聞き取り調査による)

2) 小規模企業経営型

この類型では広い土地を持っていた地元出身者がその主な経営者となっている.長い歴史を持ち,湯治場の時期から施設を拡大しつつ,現在までの規模に達している.ほとんどが湯村温泉道路の両側の中心地域に立地し,収容人数は100名から250名である.従業員は家族労働力と,数名の社員が主体で,そのほか,近隣住民をパートやアルバイトとして雇用している.なかにはスナックや料理店など多角経営を図った旅館もあるが,現在,兼業施設のほとんどは手放されている.ただし,アパートや駐車場の賃貸業務を行う業者は存在する.各旅館とも,各々の歴史と伝統をアピールして,各旅館の特色を創出している.C旅館の白壁の2階建て,広い和風式庭園,露天風呂を特色とした和風雰囲気,D旅館の手打ちそばとプール,E旅館の貴重な郷土資料コーナーがその典型例である.さらに,F旅館による温泉療養機能へのアピールや地産自消の特別料理の提供,G旅館の著名文学者コーナーJ旅館の美術館,K旅館の弘法大師の杖の湯跡なども挙げられる.経営者相互のつながりも強く,湯村温泉の旅館で中心的地位にあり,地域振興の中核となっている.

3) 小型家族経営型

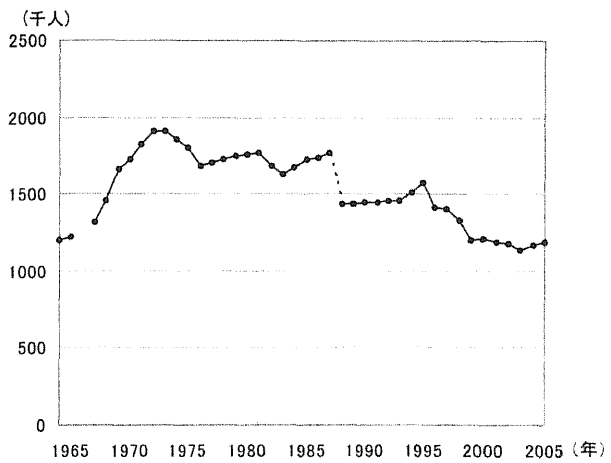
この類型では,収容人数が50以下で,忙しい時期のみ近隣の労働力を雇い,家族労働力が主体である.ほとんどが1930年代後半に創業し,大規模の増改築もあまりなく,小規模のままで経営している.3軒が「鷲の湯」の近くに位置し,源泉を所有していないものの,「鷲の湯」の湯株主として分湯の形で温泉を保有している.料金が安く,学生グループ,受験生,露天商や工事関係者が主な客層になっている.2軒は兼業であり,経営者は婦人で,夫は定年後に旅館経営に携わっている.後継者問題が深刻な類型で,最近廃業した3軒の小型家族経営型宿もその背景に後継者不足問題があった.

Ⅲ－3　利用客の季節的特性と地域構成

湯村温泉の利用客数に関しては，継続的にとらえられる統計データが存在しない．そのため，1987年までは山梨県による統計資料を，それ以降は，統計方法が変化しているものの，甲府市観光課の資料を使用することによって全体的な傾向をみることにする（第３図）．湯村温泉の利用客は，1973年までは緩やかな成長を示した．しかし，オイルショック以降は徐々に減少する傾向を示している．近年では，100万人前後を推移している．観光客の属性をみると1950年代から1970年代までは60%～70%が企業団体などのグループであった．しかし，1980年代以降の利用客は，高齢者や，家族連れなどの小グループと個人が主体で，団体としては学生合宿が卓越する．東京大都市圏からの利用客が７割以上で，次いでその周辺地域となっている．外国からの利用客はほとんどいない．第４図には宿泊客月別推移を示した．全体の特徴は，月別変動がそれほど大きくないことである．年末・年始の忘年会・新年会による地元宴会客，２月の塩沢寺祭りの露天商利用客，２・３月の受験生が主な利用者である．夏と秋の観光シーズンには利用客数がやや多い．

Ⅳ　湯村温泉地域の社会環境と地域活性化

湯村温泉には「湯村温泉旅館協同組合」，「町作り協議会」，「湯村温泉・女将の会」，「魅力作り委員会」などの多様な地域社会組織がある．いずれの組織も湯村温泉の旅館経営者が中核となっている．「湯村温泉旅館協同組合」の成立が最も古く，その前身は1936年設立の「湯村温泉商業旅館組合」で，1947年に「湯村温泉旅館組合」として再設され，道路の整備や温泉旅館の調整など湯村温泉地が観光地化する過程で重要な役割を果たしてきた．近年，宿泊客の停滞という厳しい状況が続く中で，湯村温泉地域の活性化を図るため，旅館や関連業者と地域住民が一体となって地域振興に取り組んでいる．1995年に，湯村温泉協同組合青年部を中心に湯村活性化研究会が組織され，地域住民と業者の賛同のもとで「湯村街づくり協議会」が設立された[1]．本組織の設立は，旅館経営活性化が地域活性事業の一環としてとらえられたことを意味している．同会は湯村を「都市温泉公園」として整備する発想に基づいて，①交通・防災，②景観・歴史，③温泉・イベント，④交流・商業の４事業を中心に活動を展開している[2]．具体的には，湯



第３図　湯村温泉における観光客入込数の変遷

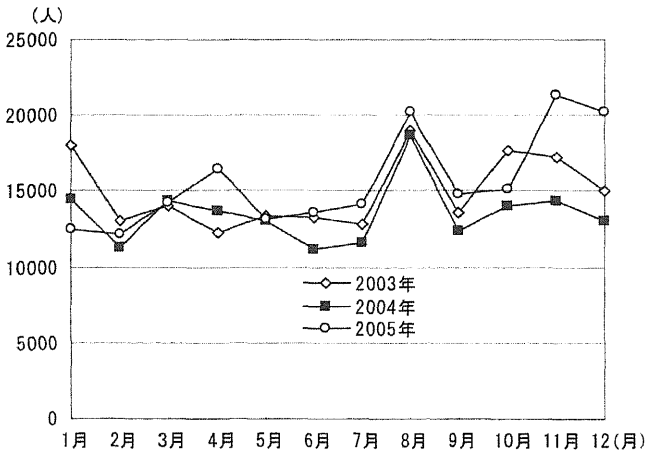
注：１．1987年までは山梨県観光統計に基づいており，湯村温泉を含む甲府市全体の数値を示す．
　　２．1988年以降は甲府市観光課の統計に基づく甲府市内の旅館全体を示す．
　　３．空白年はデータの欠如．

村温泉旅館組合のメンバーが中心になって，湯村温泉地域の魅力作り事業を重点に湯村地域観光環境整備作業を行っている[3]．1997年４月，弘法大師との関わりへのイメージアップと，地域の美的環境をアピールするために，弘法大師によって伝われたとされる「オールドローズ」を湯村の花とし，これを中心にした「花いっぱい事業」が展開された．また，高齢者－児童交流会などの多様な活動を通した高齢者や子供にやさしい生活環境づくりは地域住民の積極な関与を助長している．他に，市への陳情活動や，湯村新聞の発行，他温泉地域への定期的な研修活動などが挙げられる．これに加え，2002年から旅館の経営で最も欠かせない女将同士の交流を促進する目的で作られた組織が「湯村温泉・女将の会」である．斡旋の実施や，花いっぱい事業の中心となるオールドローズ植栽関連し，下花植栽の提案など，細部にまで気を配って，地域振興のために重要な貢献をしている．これらの社会組織の趣旨は，湯村地域の優劣を徹底分析し，資源を最大限に活かし，欠点は最小限に減らし，湯村地域を客が集まる，住民が住みやすいところに変容させることである．

Ⅴ　おわりに

本稿では甲府盆地の都市温泉地である湯村温泉を対象地域として，温泉機能の変遷と旅館経営の特徴を検討した．

湯村温泉は1000年以上の歴史を持ち，温泉はもちろん，古墳，社寺，湯跡などの史跡，有名人の物語，山水などの観光資源を有する市街地内部の温泉である．江戸時代から湯治場として愛用され，高度経済成長期の観光ブームの中で温泉観光地，昇仙峡観光の宿泊地として隆盛期を迎えた．しかし，石和温泉の台頭による観光客の減少，経済不振による観光ブームの低落と観光需要の変化，自動車社会の到来による日帰り観光の増加などの外的要因，および急激な都市化による温泉郷イメージの崩壊，少子化による後継者不足などの内的要因によって，1970年代後半からは衰退傾向を示している．しかし，今日の湯村は旅館経営者が主体である地域社会団体を中心に，地域資源を活かす地域活性化事業を活発に行い，新しい変革を求めている．



第４図　湯村温泉における宿泊者数の月別変動（2003～2005年）
（Ｈホテルの資料による）

本稿の作成にあたり，甲府市産業部観光開発課の高野誠様には大変お世話になりました．また，現地調査では，ホテル・旅館経営者の皆様にご協力いただきました．筑波大学生命環境科学研究科の呉羽正昭先生には，終始ご指導いただきました．
末筆ながら，以上記して厚く御礼申し上げます．

［注］

1）「湯村街づくり協議会」発足以降，より具体的な政策立案議論が行われている．その具体策として，地元旅館や自治会などで構成される「甲府湯村温泉地域魅力づくり事業委員会」が2006年４月に発足した．ここでは，景観整備や散策などの四つの部会に分かれ，活性化策を検討している．同時に，JTB 協定旅館ホテル連盟の「観光地の魅力づくり支援事業」実施地域となり，年間200万円の補助金が支給された．その資金で同年10月からは，新しい看板を作り，新聞風のチラシ「湯村温泉新聞」も発行した．

2）文化人らを主役にした「温泉街おこし」の一環として，文化人ゆかりの地を訪ねるツアー，若者を呼ぶためのコンサートなどイベントの実施が行われている．ツアー日程は２日間であり，観光地の再生を支援するJTB 協定旅館ホテル連盟も資金協力している．第１日目の午後１時に甲府駅北口を出発し，太宰の妻・石原美知子の実家跡，行きつけの酒店や風呂屋，新婚時代を過ごした新居跡などを歩く．夜は太宰が小説執筆のために1942，1943年に滞在した明治旅館で古い写真などを鑑賞する「夜会」を開くほか，伝記的映画を上映する．ホテル湯伝前に，レトロな雰囲気の駄菓子屋や夕市のセット「昭和湯けむり横丁」も立ち上げる．第２日目は小説に描かれた，甲府城跡や東洋館ホテルなど市内の見どころを歩いて巡る．

3）湯村温泉地域魅力づくり事業委員会散策部会が行う観光環境整備作業の基本方針は，「レトロな昭和時代の懐かしさ」といった，特定のテーマに基づいた湯村の雰囲気づくりを実行していくことである．

［文　献］

浅香幸雄・山村順次編著（1974）：『観光地理学』大明堂．
浦　達雄（1998）：『観光地の成り立ち－温泉・高原・都市－』古今書院．
中央温泉研究所（1990）：『甲府市湯村温泉源調査報告書』
山村順次（1987）：『日本の温泉地　－その発達と現状のあり方－』日本温泉協会．